

## 第二百六十八話 失われつつある大事なもの！

日本人は大事なものを忘れていないか、敢えてそれを意識的に避けていないか、そのような懸念を抱く時がある。「消えゆく太平洋戦争の戦跡」(山川出版社)掲載の写真を見てその思いを強くした。

### 1 消えゆく戦跡

日米が死闘を繰り返した太平洋の島嶼、東南アジア諸国の戦場には今なお、当時の主として日本軍の各種兵器(航空機、戦車や機銃等)、軍事施設(各種掩体壕等)、戦いの後を物語る建物が多数存在している。それらのあるものは当該国や関係機関の努力により資料館や公園として維持管理されているが、ジャングルや海岸に或いは水中に放置されているものも数多い。中には現在でも活用されているものがある。日本は何を為すべきだろうか。当該国に対する支援の要否は

### 2 風化する遺骨

各種の情報や収容団の努力によって、収容できた遺骨を鑑定することが重要である。人骨か獣骨か、日本人の遺骨か否か、収容された遺骨は何柱なのかの判定を経て、日本に環送され、戦没者の特定が行われる。戦没者特定に繋がる遺留品がない場合等には、最終的にはDNA鑑定により特定することになる。

日本人ではない遺骨が日本人と偽られた事案がフィリピンとロシアで生じたのは痛恨の極みである。DNAによる戦没者特定に必要な関係資料の収集整理も必要だ。何れにしる、時間が経てば経つほど遺骨の鑑定には特段の手間暇を要する。態勢整理が必要かもしれぬ。

因みに、過去3年間のDNA実施状況は、R1:25/256, R2:26/212 R3:10/503(分子が判明件数)

### 3 遅々たる遺骨収容

海外戦没者240万柱のうち約半数の128万柱のご遺骨が収容された。未収容遺骨約11万柱のうち海没遺骨、相手国の事情により収容困難な遺骨を除く約59万柱が未収容遺骨とされる。遺骨収容を促進するために、国は平成28年「遺骨収集の推進に関する法律」を制定し、遺骨収容を国の責務と位置付け(このことは前進ではあるが・・・)、8年間の遺骨収集施策の集中実施期間を設けた。が、この集中期間何実施された収容事業でも年間収容数は1000柱弱であり、全遺骨の御帰還はとても望むべくもない。

抜本的な対策が望まれる。国は積極的方針に転換を。

参考:地域別戦没者遺骨収容概見図(令和4年3月末現在)

<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000144250.html>

### 4 薄れる記憶

戦後生まれが全人口の84.5%(令和元年推計)を占め、終戦から77年近く、先の大戦を知るものは減少の一過を辿っている。戦後教育が現代史に関する教育を避けてきた所為もあって、日米が過去に戦ったことすら知らない世代が増えている。記憶から歴史に移行する程の時間が経ったにも関わらずに、真っ正面から先の戦争に向き合わない。国論の分断を恐れて議論すらしない。戦後イデオロギーは然程に強固である。正史の確定を

### 5 進まぬ慰霊・顕彰

大東亜戦争の全戦没者310万人である。戦没者に対する慰霊顕彰は、国主催の戦没者追悼式、靖国神社や千鳥ヶ淵戦没者墓苑での慰霊・顕彰、慰霊諸団体による慰霊祭、各地における各種慰霊祭、海外慰霊碑の建立や慰霊巡拝の実施等があるが、関係者の高齢化、物故者の増加もあり、更には、慰霊顕彰を継承すべき世代の関心も低調であり、暗澹たる思いに駆られる。国家による慰霊・顕彰を！

(了)

